

# シンポジウム記録

## 「ピエール・ノラ編『記憶の場』をどう読むか —日本語版の投げかけるもの—」

### まえがき

工藤 光一

海外事情研究所は、1999年度から3年間にわたって科研費プロジェクト「近代国民国家形成における国民的『記憶』の総合的研究」を運営し、その成果は毎年『クアドランテ』に公表してきた。ここに掲載するのは、同プロジェクトの「ヨーロッパ部会」が企画し、2002年3月16日に東京外国語大学で開催したシンポジウムの記録である。このシンポジウムは、同プロジェクトによる一連のシンポジウムやワークショップのうち最後に開催されたものとなった。開催から1年を経過してしまったが、日程的に『クアドランテ』第4号への記録の掲載が間に合わず、本号での公表となった次第である。

ピエール・ノラが監修した『記憶の場』Pierre NORA (sous la direction de), *Les lieux de mémoire*, 7 vol., Gallimard, Paris, 1984-1992 は、われわれがこのプロジェクトを構想するに当たって、考察の出発点とした研究のひとつであった。それを発展的に継承しようとするか、あるいは批判的に超克しようとするかは、プロジェクトのメンバーの間で必ずしも一致していたわけではな

い、これを考察の基点に据えるという認識をわれわれは共有していた。「国民国家と集合的記憶」を主要なテーマとして研究と議論を進めてきた「ヨーロッパ部会」では、一連の研究を経たうえで再びこの基点に立ち戻り、壮大な迷宮にもたとえられて全貌のつかみがたい『記憶の場』の意義を改めて総体的に捉え直したいと考えるに至ったのである。

そうしたわれわれのプロジェクトと平行して、『記憶の場』の日本語版の刊行準備が谷川稔氏を中心とする翻訳チームによって進められ、そのお仕事の一部は雑誌『思想』2000年5月の「記憶の場」小特集号にすでに公表されていた。私がこの翻訳チームの末席に連なっていた縁もあって、「ヨーロッパ部会」は、谷川氏を始めとする翻訳チームの皆さんとともにノラの壮大なプロジェクトの意義について考え、合わせて間もなく刊行予定の『記憶の場』日本語版がいまの日本の知的・学問的状況に何を投げかけ得るか、ということを議論するために、翻訳チームの皆さんにシンポジウムの開催を呼びかけたところ、賛同していただけた。基調報告を谷川氏にお願いし、翻訳チームの皆さん

## 6 はじめに

全員（谷川氏、私を含めて計 13 人。お名前は後述）が参加していただけることになった。

また、「ヨーロッパ部会」は、すでにプロジェクトの 2 年目からヨーロッパの枠を超えて、日本史研究者との対話を始めており、2001 年 2 月 2 日に東京外国語大学で開催されたワークショップ「国民国家と集合的記憶Ⅱ」では、チェコよりズデニェク・ホイダ氏をお招きするとともに、日本近代史の阿部安成氏にご報告をお願いして議論していた（『クアドランテ』第 3 号参照）。ここでの議論を踏まえつつ、『記憶の場』をめぐるシンポジウムでも、「国民国家と集合的記憶」というテーマをめぐって、日本史研究者との対話をさらに深めてゆくことを企図した。日・欧という研究対象の違いを乗り越えての対話は、『記憶の場』翻訳チームのリーダー谷川氏も積極的に望まれたことであった。そこで、日本近代史の安丸良夫氏と牧原憲夫氏にコメントをお願いし、これもご快諾いただけた。3 人目のコメンテーターとして、われわれのプロジェクトの「アジア部会」のメンバーである岩崎稔氏に加わってもらった。

このようにきわめて充実した布陣でシンポジウムに望めることになったが、開催の時点では、まだ『記憶の場』日本語版が刊行されていなかったため、翻訳者の方々の翻訳原稿のうちから何本か選んで冊子にまとめ、これをコメンテーターの皆さんに読んでいただいてコメントをご準備願うというかたちを取ることにし

た。谷川氏の報告にもあるとおり、日本語版は、原著とは独自の異なる編集方針の下に、31 本の論考をピックアップして 3 巻にまとめた構成となっているが、谷川氏が執筆された日本語版序文に当たる論考、ならびにノラの原著総序「記憶と歴史のはざまに」を別として、1 巻につき 4 本の論文を翻訳チームの皆さんに選んでいただき、400 頁を超える厚い冊子にまとめた。以下、冊子の構成を記しておく。

谷川稔『『記憶の場』の彼方に—日本語版序文にかえて』

ピエール・ノラ「記憶と歴史のはざまに」（長井伸仁訳）

第 1 巻「対立」

フィリップ・ジュタール「プロテスタント—荒野の博物館」（和田光司訳）

ピエール・ビルンボーム「ユダヤ人—グレゴワール、ドレフュス、ドランシー、コペルニック街」（加藤克夫訳）

アラン・コルバン「パリと地方」（工藤光一訳）  
ジャン＝マリー・マユール「アルザス—国境と記憶」（中本真生子訳）

第 2 巻「統合」

ラウル・ジラルデ「三色旗—白旗でも、赤旗でもなく」（天野知恵子訳）

ミシェル・ヴォヴェル「ラ・マルセイエーズ—戦争か平和か」（竹中幸史訳）

ジャック・オズーフ、モナ・オズーフ『『二人

『子どものフランス巡歴』—共和国の小さな赤い本（平野千果子訳）

ピエール・ノラ「ラヴィス 国民の教師—共和国の福音書『プチ・ラヴィス』」（渡辺和行訳）

第3巻「模索」

ジェラルド・ド＝ピュイメージュ「兵士ショーヴァン」（上垣豊訳）

アンドレ・ヴォーシェ「カテドラル」（江川温訳）

ジョルジュ・ヴィガレロ「ツール・ド・フランス」（杉本淑彦訳）

ピエール・ノラ「コメモラシオンの時代」（工藤光一訳）

冊子にはこのほか、冊子所収論文の訳者解題、日本語版目次、原著総目次を収めた。コメンテーターの方々には、谷川氏の序文とノラの総序はすべての方に、そして主に第1巻を安丸氏、第2巻を牧原氏、第3巻を岩崎氏に読んでいただくようお願いした。なお、シンポジウム当日は資料として、谷川氏の序文（報告はこれに基づいて行われた）、冊子所収論文の訳者解題、日本語版目次、原著総目次をフロアの全参加者にも配布した。

シンポジウムの構成は、次のとおりである（以下、敬称略）。

趣旨説明：工藤光一（東京外国語大学）

基調報告：谷川稔（京都大学）

『記憶の場』の彼方に

—日本語版をどう読むか—

コメント：安丸良夫（歴史家）

牧原憲夫（東京経済大学）

岩崎稔（東京外国語大学）

コメントへの応答—翻訳チームから：

渡辺和行（奈良女子大学）

江川温（大阪大学）

長井伸仁（徳島大学）

討 論

司 会：工藤光一

当日の構成のうち、趣旨説明の部分は、すでにこの「まえがき」でその内容を述べたので、以下の記録では省略する。翻訳チームからの応答は、時間の都合上、3人の方だけをお願いすることになった（フランス現代史の渡辺氏、西欧中世史の江川氏、そして『記憶の場』日本語版刊行の提案者でフランス近代史の長井氏）。せっかくチーム・メンバー全員にお集まりいただいたのに、すべての方にご発言の機会をつくれなかったことは主催者側の落ち度である。翻訳チームの皆さんに心からお詫び申し上げたい。上記以外の翻訳チームのメンバーは次の方々である（50音順、敬称略、所属は当時のものの）。

天野知恵子（和歌山大学）

上垣豊（龍谷大学）

## 8 はじめに

加藤克夫（島根大学）

杉本淑彦（大阪大学）

竹中幸史（名古屋外国語大学）

中本真生子（立命館大学）

平野千果子（武蔵大学）

和田光司（聖学院大学）

シンポジウムでの議論は、「国民国家と集合的記憶」というテーマに留まらず、ノラの「史学的方法」の持つ可能性を問うところから、歴史認識と歴史叙述のあり方へと深く踏みこんでゆくに至った。限られた時間であったにもかかわらず、非常に濃密な議論が交わされたことをたいへん喜ばしく思っている。原著の「まぎれもない「読み替え」」（谷川氏）である『記憶の場』日本語版が何を投げかけ得るか、という問題は、このシンポジウムでは必ずしも十分に議論できなかったが、それは、日本語版の刊行が最近完結をみたので（岩波書店より 2002 年 11 月に第 1 巻、2003 年 1 月に第 2 巻、同年 3 月に第 3 巻が刊行）、これから本格的に検討されてゆくことだろう。この記録の公表が、今後の活発な議論の呼び水となることを大いに期待する次第である。最後になったが、シンポジウムの開催にご協力いただいたすべての方々に改めて心から御礼申し上げたい。

（くどう こういち・東京外国語大学）